

## 課題 「斜めとイエ」

函館、小樽等の坂のまちや美瑛の丘など、道内の至るところに傾斜地が存在します。敷地に高低差があることにより、アクセスのしにくさや、無駄な空間が発生しやすいなど課題がある一方で、住空間に様々な可能性がひろがります。

イエは傾斜地にあることで、周りとの関係が変化し、その見え方も変わってきます。そして、傾斜地にあることにより、住宅内部での垂直方向の「しつらえ」が大きく変化し、イエから見えるまちなみや空と大地の姿が大きく変わってきます。

まちなかや郊外を問わず、あなたの身近にある道内各地の斜めの土地を自由に想定し、今までにないイエのかたちを提案してください。

### 計画条件

- ・北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

### 賞金

- ・最優秀賞 25万円（1点）
- ・優秀賞 5万円（2点）
- ・奨励賞 2万円（4点）

### 締切（厳守してください。）

- ・2022年9月30日（金）持参の場合は16時必着。郵送の場合も9月30日（金）必着。

### 参加資格

- ・一般、学生等を問いません。
- ・北海道内居住者とします（学生・生徒は北海道内の大学等に在籍している者に限ります）。
- ・個人参加、グループ参加は自由です。

### 提出物

#### (1) 図面

設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。

図面には、氏名、記号などを記入しないでください。

A1（841×594）サイズ一枚、横づかい（縦づかいは無効です）。表現は自由です。

ハレパネ又はスチレンボード（厚さ5mm程度）な

どでパネル化してください。表面の貼付材がはがれないように作成してください。

#### (2) 返信用ハガキ

受付番号をお知らせするために使用しますので63円の官製ハガキに応募者の住所・氏名を記入して提出してください（官製はがき以外は、受付できません。）

#### (3) 応募用紙

応募作品の「作品名」と応募者の郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、所属先名（学生は、学校名・学年）、電話番号をA4版縦づかいの用紙に記入して（形式は自由）応募作品とともに提出してください。

### 審査委員（委員は五十音順）

委員長 米田 浩志

北海学園大学工学部建築学科教授

委員 赤坂 真一郎

㈱アカサカシンイチロウアトリエ代表取締役

委員 小澤 丈夫

北海道大学大学院工学研究院教授

委員 小西 彦仁

ヒココニシアーキテクチュア㈱代表取締役

委員 佐藤 孝

北海道科学大学工学部名誉教授

委員 澤田 貞和

㈱日本工房会長

委員 松田 真人

㈱都市設計研究所代表取締役

## 選考経過

### ①一次審査（2022年10月3日～6日）

一次審査通過者の受付番号は10月14日(金)頃に主催者ホームページ（[www.do-kjk.or.jp](http://www.do-kjk.or.jp)）で発表します。

### ②二次審査（2022年10月26日10：30～）

一次審査通過作品から10作品を選出します。

### ③最終審査（2022年10月26日13：00～）

二次審査通過作品（10作品）から各賞（計7作品）を決定します。

最終審査は「公開審査」とし、当協会8階A会議室で行います。

## 入賞者発表

### ・2022年10月下旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

## 入賞作品の公開

### ・2022年10月下旬

主催者ホームページ（[www.do-kjk.or.jp](http://www.do-kjk.or.jp)）で公開します。

### ・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」（12月発行）に掲載します。

また、最優秀賞受賞の方には、同誌への寄稿をお願いしています。

## 応募作品の著作権等

・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。

・応募作品は原則として返却しません（返却希望の場合は、事務局に相談してください）。

### 提出先

〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地  
設計会館 9階  
一般社団法人 北海道建築士事務所協会  
TEL 0111-788-7650  
ホームページアドレス <http://www.do-kjk.or.jp>

## 第47回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞者名簿

最優秀賞 武者 凌 平 北海学園大学4年  
(共同作品) 塩野谷 基 悟 北海学園大学4年

優秀賞 塩野谷 基 悟 北海学園大学4年

優秀賞 国 貞 佑 弥 室蘭工業大学大学院2年

奨励賞 三 浦 光 雅 フリーランス

奨励賞 奥 野 柊 也 北海道科学大学4年

奨励賞 尾 田 美 月 札幌市立大学3年

奨励賞 三 浦 光 雅 フリーランス

## 主 催

(一社)北海道建築士事務所協会

## 後 援 (順不同)

北海道

(一財)北海道建築指導センター

(一社)北海道建築士会

(公社)日本建築家協会北海道支部

(一社)日本建築学会北海道支部

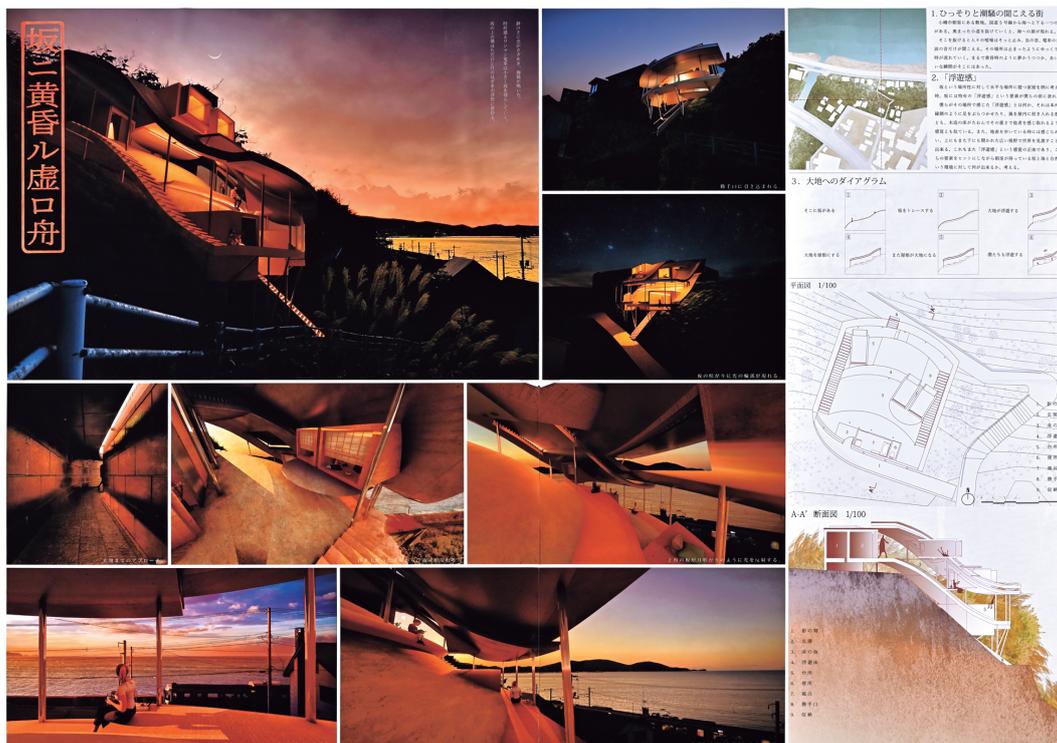
(株)北海道建設新聞社

最優秀賞

# 「坂二黄昏ル虚口船」

武者 凌 平 (北海学園大学 4年)  
塩野谷 基 悟 (北海学園大学 4年)

(共同作品)



小樽市朝里、国道5号線から北の石狩湾に下る急峻な坂地に建てられた住宅である。斜面の形状をトレースした2枚の曲面を、斜面と平行に浮かべ床と屋根とし、その間の空間に水平な床や個室のボリュームを差し込むことによって、日常の生活が営める空間に設えている。

屋根はミニマムサイズの柱で支持されているため、主空間は大きく海側に開放される。四季や一日の時間の流れを通して、様々な表情を見せる石狩湾の雄大なパノラマを堪能しながら、眼下に連なる家々の屋根や灯火、海外沿いを走る函館本線の列車にまちの営みを感じることができる。視覚だけでなく、海風が運ぶ潮の香り、斜面の草木が醸し出す匂い、茂みに棲む虫の音色など、穏やかな日常の情景を五感で楽しむことができる場がここにつくられている。

一方で、荒天時に大きくうねる海面や北から強く吹き付ける雨風は、斜面地という不安定な場に身を置く者に緊張感を強いることになる。しかしながら、自らが身を置く環境に直接身体を晒しながら、五感をフルに動員して様々な場面を感じとることは、現代に生きる私たちが失いつつある人間が本来もっていた鋭敏で豊かな感性を、呼び起こすことにつながるだろう。

坂の下から見上げると、建築とランドスケープが直結された住宅の姿が印象的に映る。現代の住宅が纏いがちな汎用的な価値観に囚われない、荒削りでダイナミックな解放感を味わわせてくれるであろうこの住宅を、全審査員が一致して最優秀賞に推挙した。

審査委員会委員 小澤 丈夫

優秀賞

# 「裏坂の社」

塩野谷 基 悟

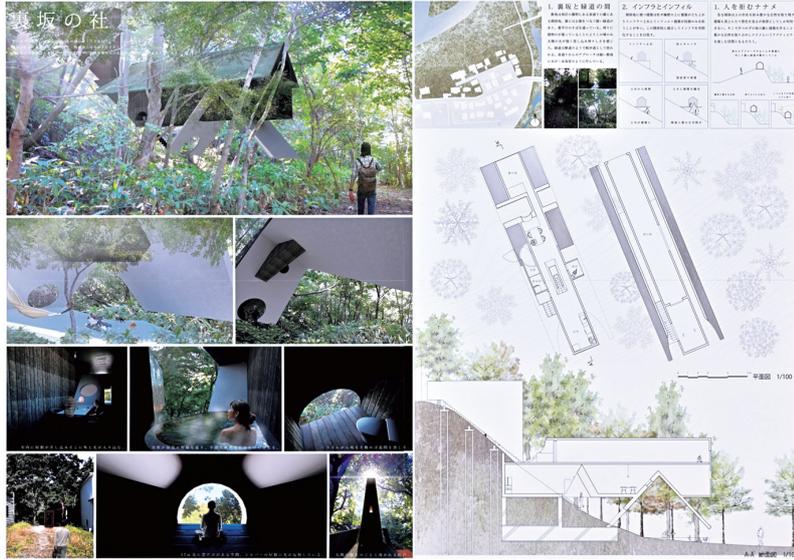
北海学園大学 4年

この作品は人を寄せ付けない急こう配の斜面に土木スケールのインフラを架け、このインフラ周りに建築空間をまわりつかせようとする試みです。こうすることで、光や森が、様々な形で建築空間をとおして、住み手の五感に入り込んできています。

元々日本人が持っていた、自然の中のどこにでも神が宿るといったアニミズムの精神を感じさせ、日本各地にみられる神々しい森の前面に位置する神社のような香りのする作品です。人を寄せ付けない斜面にあるからこそ、「ヒト」に自然がすり寄ってきて、宇宙(神)に近づくことができているように思えます。更に、階段を上って住宅内を進むプロセスも時間を感じさせ奥行きを増しています。

コンセプトは、課題の問いかけに正面からこたえており、大きな可能性を感じさせてくれます。惜しむらくは、平面と断面の不整合や表現不足により最高位を逃しているのではないのでしょうか。

審査委員会委員 松田 真人



優秀賞

# 「斜と暮す | 平に住う」

国 貞 佑 弥

室蘭工業大学大学院 2年

美瑛の緩やかな丘の牧草地に計画された住居は、傾斜する地面に対し少し潜らせた平らな床を住むための床とした。平家の家は斜面の高い方は軒が低く、斜面の低い方は軒が緩やかに高められている。家の床は斜面の低い方に合わせてあり、斜面は徐々に高くなり家の半分ぐらいが潜り込んでいる。また平面上はおおらかな中庭を持ち、室内では床と外の斜面が場所により変化する。斜面下の空間は天井が高く中庭に開放された開口部により斜面を抱擁し豊かな空間となっている。中庭を添うように奥に進むにつれ斜面に潜り込み寝室へと到達する。静と動の空間が外の斜面に関係しているのだ。

ミニマムな操作がより水平の床と自然の傾斜を強く関係づけたあたりは作者の力量を感じるが、開口部の操作にもう一考欲しかった。

審査委員会委員 小西 彦仁



奨励賞

# 「樽前ガローは輪廻を揺さぶる」

三浦光雅

フリーランス



敷地は樽前山の南山麓に広がる森林地帯。人が近よらないような場所である。

ここに画家のためのアトリエ兼別荘を建てる計画。

ほとんど誰もいない自然環境に身を置く創作活動の場。間仕切りはなく、曲面と変化する廊下幅が場を仕切るプラン。巾の広い部分に創作する場と生活する場があるが、対峙する広大な自然の取り込みを眺めるだけでなく、空間においても係って良かったのではないだろうか。川が流れ苔が生え、空気が湿潤で綺麗で澄んでいるはず。その自然を建築化して欲しかった。図面はとても綺麗に描かれているが中庭が退屈な空間になっている。下に降りて行けるなどの仕掛けがあるとより高い評価になると思う惜しい作品である。

審査委員会委員 澤田 貞和

奨励賞

# 「間を結ぶ家」

奥野 柊也

北海道科学大学 4年



傾いた地面の一部が隆起し、そのまま搭状に空へと伸びてゆくトポロジカルな提案である。

特徴的な断面を生かした空間構成に加え、光・風・熱といった要素が巧みにコントロールされ、「地中」のようなやや閉じた空間でありながら住まいとしての快適性が担保されていることが評価された。

しかしながら、地形、空、植物などのメタファーとも捉えられるこのダイナミックな提案には、住宅地の一角よりもふさわしい敷地が、道内に数多くあったのではないかとと思われる。

審査委員会委員 赤坂 真一郎

奨励賞

# 「緩急をもたらす家」

尾田 美月

札幌市立大学 3年

この作品は、傾斜敷地とイエの関係について、分析的眼差しから生み出した空間であり、傾斜地面と人のアクティビティをもつ建築である。

低い地面に沿ってアプローチすると、いつの間にか家の内側の地面に立つ。見上げると圧倒的な高さの空間であり、季節の風の匂いが抜ける。冬になると傾斜地側の部屋の窓は、雪で埋まるが、積層した雪を透す光はクレパスのようなグラデーションを生む。

この作品には、傾斜地と北海道の四季を凝視した高い解像度がある。しかし基礎耐圧版により、置き土となった点は残念だ。上の賞を狙えた作品であった。

傾斜に建つことの分析とともに、建築空間を魅力とする優れた作品である。

審査委員会委員 佐藤 孝



奨励賞

# 「彼等は此処に根を下ろす」

三浦 光雅

フリーランス

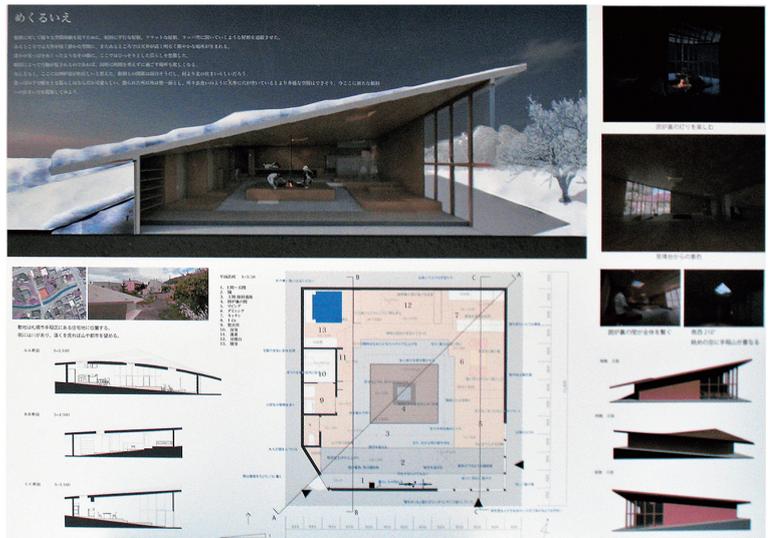
敷地の高低差に屋根を架け、その上を歩けるような湾曲した屋根を持つこのイエは、昆虫をも思わせる個性豊かな計画である。内部は傾斜地のまま床をつくっているため、高さの違う場所だらけである。大きな屋根を架けたことにより、内部は半地下のようになり外部との繋がりが少ない。そのためか団らんの空間はひろいが落ち着いて見えない。またダイニングの壁は光が降り注ぎ光を拡散する壁（開口）でも良かったのでは。曲面の壁や湾曲した屋根を持ちながらも、外部空間を取り込んだ場があれば、大切な居住空間をもっと生かしたのではないかとと思われる。綺麗な図面でよく考え描かれているだけに、残念で惜しい作品である。

審査委員会委員 澤田 貞和



加藤 丈治

北海道科学大学 4年



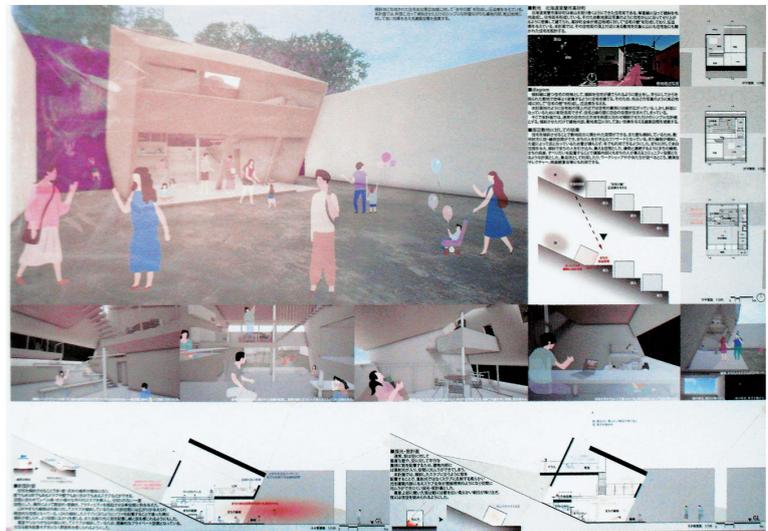
小西 神太郎

北海道科学大学 3年



加藤 雅大

室蘭工業大学大学院 1年



# 1次審査通過作品

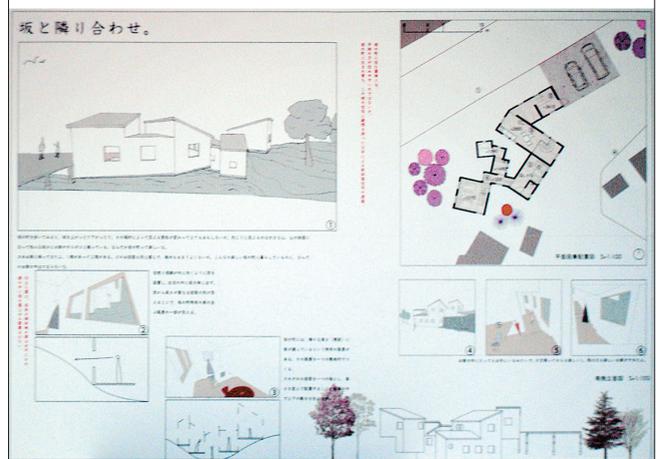
高橋 遼之介

星槎道都大学 3年



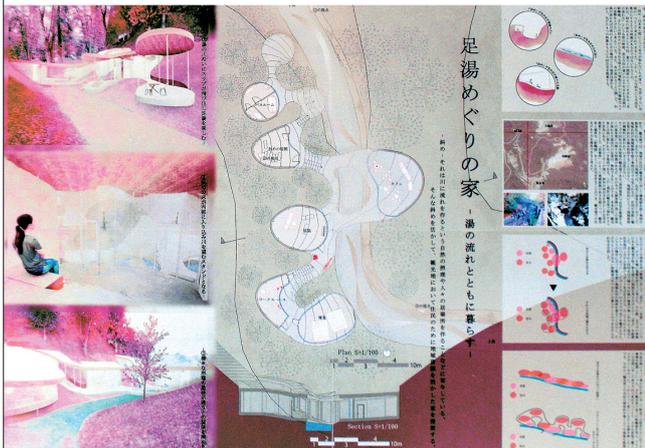
中村 龍

北海学園大学 2年



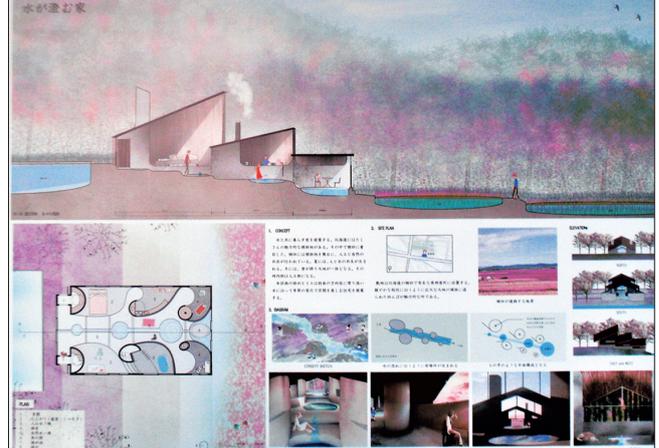
藤井 淳史

北海道大学大学院 1年



田元 良

北海道科学大学大学院 1年



二次審査



最終審査 (公開形式)

# 総 評

ここ数年のコロナ禍は、コンペ開催方法にも大きな影響を与えてきたが、今年47回目を迎える「北の住まい住宅設計コンペ」においては、ようやく公開審査を含めた対面形式の平常開催となった。このコンペの目的は、北海道特有の風土環境から導かれる住宅形式のあり方を探求することにある。北海道の住宅を考える上で、原自然との関係を創り出すことは大きなテーマになる。今回この観点から、課題は「斜めとイエ」を提示した。斜め（傾斜地）は、より自然性を意識させる要素である。建築には、水平と垂直の要素が組み込まれ、ある意味、人工的な環境が形成されている。そこに、あえて斜め（傾斜地）の要素を積極的に取り入れることによって、新たな自然との対話関係を生み出すことになるのではないだろうか。

今年の応募作品の締め切りは、9月30日(金)であった。応募総数は、57作品で、ほぼ昨年と同数であった。その後、第1次審査を10月3日(月)から6日(木)まで行った。この段階では各審査委員が7票投じ、1票でも投じられた作品を第1次審査通過作品とした。今年は57作品中14作品に絞られた。そして、第2次審査は10月26日(水)午前中に行われ、各作品の特徴を審査委員間で確認をし、投票によって10作品が選出された。その後、同日午後に最終審査を公開形式で行った。改めて各作品に対する評価を行い、議論を重ね度重なる投票の上、10作品から7作品が選出された。この7作品は副賞付の入賞作品となる。さらに、審査を進め、最優秀作品1点と優秀賞作品2点、そして4作品の奨励賞作品が選出された。

最優秀賞作品（武者、塩野谷、共同案）は、初期の審査から評価が高く、全員が最優秀賞と判断した満票作品である。傾斜地として急勾配な崖を敷地と設定しながらも破綻のない空間構成であった。内部空間はスリリングさを含みつつも、崖地の特性に加え、そこから見える海辺の風景と音を十分に享受できる極めて完成度の高い作品であった。そして、優秀賞作品（塩野谷案）は、自然の景色と地形を生かし、森の静寂さを住空間に接続させていた。自然が持つ神秘性が瞑想体験と共振する空間構成であった。描かれていた静謐な空間は、制作者が森と深く対話した結果であろう。もう一点の優秀賞作品（国貞案）は、緩やかな丘に沈み込むかのように配置されていた。内部の各開口部においては、傾斜地と連動し、多様な風景を再認識できる。この空間体験は外部との一体感を生み出し、傾斜地に住むことの可能性を提示していた。奨励賞作品4点もそれぞれに特徴を有した優秀な作品であった。

改めて、斜め（傾斜地）に着目することによって、原自然の存在を再認識する機会になったと想像している。それぞれ具体化された空間からは、人間の身体や精神に影響を与えるような新しい住宅の風景が生み出されていた。このような創造的な姿勢は、新たな時代に向けて大きな可能性を切り開いていくに違いない。みなさんのさらなるご活躍を期待したい。

審査委員会委員長 米田 浩志

## 「移ろう波間に映るもの」

第47回北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞者

武者 凌平（北海学園大学4年）

塩野谷基悟（北海学園大学4年）

（共同作品）

第47回北の住まい住宅設計コンペにおいて最優秀賞をいただきました。この度寄稿文を書く機会をいただいたので受賞作品について共同設計での制作過程を描きたいと思います。

今年のテーマは「斜めとイエ」ということで初めて敷地形状に制約があるテーマであったと思います。僕達はまず、斜めの土地によって生まれる暮らしや斜めがあることによって行きたくなる心地よさのようなものを共有していきました。様々な場所に行きそこで得た感覚やアイデアをその場で議論していく中で、今回の提案を進める2つの話が浮かび上がりました。1つは「おむすびころりん」です。平らな場所では不動であっても斜面が付くことによって動いてしまうということ。2つ目は「プールの飛び込み台」です。平行な板が地面から離れることで僕らの重力によりたわみます。そしてジャンプ台も不動なものが動きます。2つの共通点は不動な場が実際に動くということ。これを不動な家に取り入れるために、動かなくても動きを感じる感覚、つまり「浮遊感」を核として設計に臨みました。「浮遊感」は不動の中にたくさん存在します。縁側に座り足をぶらつかせながら風を感じる。古い床に人が乗りそのきしむ振動や音。窓から下を覗き込んだ時に高床で壁の下から植物が出てきている状況などです。これらはどれも不動の体感の中での動であるが、視覚するだけで「浮遊」を感じるものもあります。浮きながら階段を下に開くUFOや宇宙船内の無重力だからこその建具の位置のようなものです。北海道では到底実現されなかった体験できない日本古来の形式と重力の存在する地球で見ることのない形式。この古来と近未来のハイブリット住宅を北海道で実現しようと思いました。以降これをぼくらは『わびさびUFO』と名付け計画していきました。

さて、建築設計を具体的に進めるためには敷地選定が

とても重要なものでした。

選定敷地となった小樽市朝里町は札幌市から電車に揺られ30分ほど。町自体が湾岸に沿って東西に長く、その線をなぞるように小高い丘と潮騒、その間に邂逅するように佇む住宅地。宅地と湾岸の垣根に沿って電車は通り過ぎて行き、音だけがこだましていく。綺麗な一筆書きの心地よさにも似た風情が感じられ、小さくとも豊かな町がそこにありました。

『坂ニ黄昏ル虚口船』という作品はこの場所が持つ空気感に感動した僕らが肺いっぱいその空気を吸収し、そのまま建築化した時に何が現れるのか、感受性に身を任せてこの坂に住まうことを最大限に消化したモノにするため、最終的には築いてきた論理性やコンセプト性も次第に順化してゆき、五感に身を任せ、あの日あの時に朝里で出会った幾重にも連なる自然物のレイヤーを建物に重ねていくというあまりにも思直な発想法の試みという側面も大きく存在しました。確かにテーマとして「斜めとイエ」という下地は存在しましたがこの場所に出会い、何度も赴く内に「場所性の具現化」を主体とした朝里と私達との問答が主になってきたように今は実感します。

その結実として、暗がりが一直線に伸びる玄関のアプローチから始まり、玄関を通り抜けると一転、湾曲する天井が自然物から得た緩やかな光を部屋全体に乱反射させ、屋根形状と呼応してうねる「床の坂」が玄関での水平さを穿つように出迎えます。坂の途上には「浮遊床」という建物内部にそびえる縁側空間が設けられ、坂の流れを一度受け止め、屋根を貫通して浮遊する部屋へと人の流れを分散させます。波打つ「坂の床」を最後まで下ると一面の朝里の景色を展望できる、大地から伸びたもう一つの縁側へと終着し、住人は圧倒的浮遊感を不動の中に抱きます。

坂ニ黄昏ル虚口舟

